研究成果の紹介

5　カーネーションの日持ちに対する気温・日照の影響とＳＴＳ処理の効果

ねらいと成果

業務用切り花の消費低迷にともない、家庭需要を対象とした生産技術の対応が課題となっている。切り花の消費拡大には、日持ちがよく高品質な切り花を、品質保証により安心して購入できるようにすることが重要である。そこで夏期の高温及び春期の日照の日持ちへの影響と採花後の日持ち剤（STS）処理の効果について調査したところ、夏期の昇温抑制は日持ち改善効果が高く、STS処理は気温の高低にかかわらず日持ちを２倍にした。春先の過度の日照不足はSTSの吸液量を低下させるものの、日照量の多少に関わらず日持ちを倍増させた。

内　容

1　夏期の高温の影響：ガラス温室内で養液土耕により２年切り栽培した「ノラ」（2003年７月定植）を用い、無冷房区（2004年７～９月の平均気温27.3℃）と冷房区（同７～９月の昼間25℃、夜間15℃、平均気温20.7℃）の切り花の日持ちを９月中～下旬に調査した。収穫後１mMのSTS処理液または水道水を２℃の冷蔵庫内で１時間吸液させ、25℃で24時間保存した。基部を切り戻して水道水に生け、日持ち調査基準に準じ気温25℃の室内に置いた。花弁の一部が褐変又は萎凋した時点で日持ちの終了とした。

STS無処理での日持ちは無冷房区が4.3日で冷房区が6.3日、STS処理ではそれぞれ9.0日と13.5日で、いずれも冷房区が1.5倍程度長かった（図１）。STSの吸液量は冷房の有無で差はなく、日持ちがSTS処理によりほぼ２倍になった。

2　春期の日照の影響：「ノラ」（2003年７月定植、８月中旬から遮光なし及び36％遮光処理）を用い、2004年４月下旬～５月中旬に日持ちを調査した。

STS無処理では、36％遮光区で日持ちがやや短くなったが、遮光なし区と同じくSTS処理により日持ちが倍増した（図２）。STS処理した36％遮光区では、遮光なし区の10.2日に比べ9.3日とやや短かったが、これはSTSの吸液量が遮光なし区より少なかったことによるものと考えられ、過度の照度の低下はSTSの吸液量を減少させ、日持ちの低下を招くものと思われた。

今後の方針

２年切り栽培において、夏期の昇温抑制による品質向上技術の開発に取り組む。

岩井　豊通（淡路農技・農業部）
（問い合わせ先　電話：0799－42－4881）

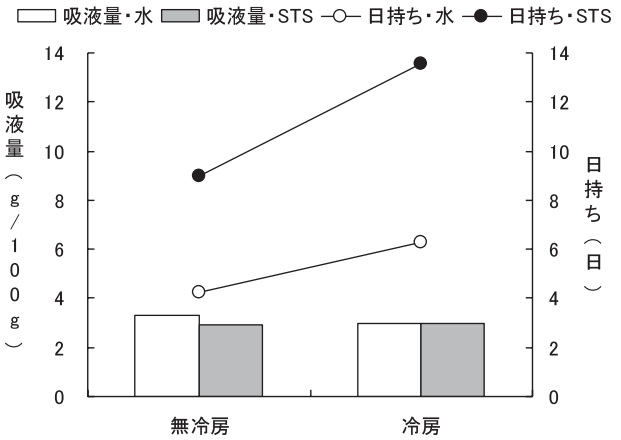

図１　冷房と日持ちの関係

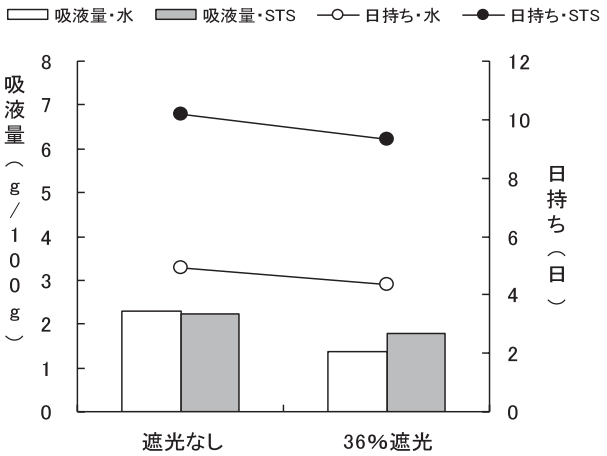

図２　遮光と日持ちの関係